

柳生月影抄

吉川英治

青空文庫

弟の窓・兄の窓

一

紺屋の干し場には、もう朝の薄陽が映している。

干瓢のように懸け並べた無数の白い布、花色の布、紅い模様のある布などが、裏町の裏から秋の空に、高々と揺れていた。

「そんな身装で、近所の人目につく。——お駒、もういい、家に這入っておれというに」
又十郎宗冬は、叱るように、後から尾いて来る彼女へいったが、お駒は、
「そこまで」

と、いつもの癖のように、妾宅の露地から小走りに——ゆうべの寝髪のまま——往來の角まで彼を送って出た。

そして又十郎が、振向きもせず急ぐ背へ、

「よござんすか。待っていますよ。——あさつてですよ。あさつてまた」

と、露地の陰から、二度もいった。

——浅ましい！

又十郎は、ぞつとするほど、その時は厭いやな気もちに襲われるのだった。あさつてまた、この露地の家へ来るのかと思うだけでも、負担であつた。

遁のがれるように足は急いでいる——。まだ露じめりのあるゆうべの笠を、銀杏いちようなりのま、横顔へ深くすぼめて、

（もう通うまい。父にもすまぬ。——いや世間に対してだつて）

独り決えぐるほど、慚ざん愧をむねに繰返すのであつた。

世間は眼まぐるしく活動している。大根だいこん河岸の市場はわいわいと旺さかんだ。金、金、金と突んのめるほど町人たちは首を前へ出して駈け歩いている。登城する騎馬の侍だの、駕籠の列にも意地わるくよく行き会う。

又十郎宗冬は、なるべく裏通り裏通りと選んで歩いた。八重洲やえすがし河岸の屋敷へ近づくにつれて、難しい父の顔が胸につかえてくる。登城して、もう屋敷にはいない時刻だが、（留守であつてくれればいいが）

と、万一の場合を惧おそれて、そればかりが祈られる。

二十四歳にもなったが、父の恐さは、幼少と変らなかつた。いや、湯女のお駒に家を持たせて、屋敷を空けがちになつてからは、よけいにあの眼が、あの眉が、いつも自分を睨めまわしている気がした。あたかも司直と罪人の間のように。

獄を出て獄へ帰るかのような悶えに絡まれながら、彼はやがて八重洲原まで来ていた。もうすぐそこに厳しいわが家の門と白い土塀があつた。

「はてな？ 何だろう」

又十郎は、ふと足を止めた。

古編笠をかぶつた浪人者が一名、埃臭い蝙蝠羽織に、溝染の袴を着、肩をそびやかして傲然と、門前に突つ立っている。——そしてそれを囲んで、門番や家来の者たち、

「たとえお在でであろうと、御不在であろうと、殿御自身が、風来の訪問者と、お試合になるなどという事は決してない。取次ぐまでもなく、無用な求めだ。帰らっしゃい、帰らっしゃい」

と、何か声高に、いい争っているのだつた。

二

「自分は兵法執心の者である。敢えて、勝負ばかりを事としたり、虚名を追ったり、旅錢と称する合力ごうりきなど求めて歩く類たぐいの者と、同視されたくないのというが——」

と、綾部大機あやべだいきは、柳生やぎゅうの門に立つた最初に、まず広言をはらって、

「——音に聞ゆる將軍家流の但馬守たじまのかみどの在宅なれば、一手、衆生しゅじょうのために布教なさると思うて、立合つていただきたい。それがしは北陸の武辺者、綾部大機というて、縁者は佐竹家の物頭ものがしら役、望みのほか、お目にかかつてから、物強ものじいは仕らぬ」

と、重ねて、門番の者へ、来意を述べたのであつた。

勿論、門番は取次がない。

「御登城中」

と、断わつた。

大機だいきは、然らば待とうという。門番はその無益を論さとして、追い返そうと努めた。こういう来訪者は、際限なくあるからである。すると大機は、門番の言葉じりを取って、

「主人の意志を聞いてみぬのに、まるで主人かのような面構えして、追い返そうとは怪し

からぬ、是が非でも、但馬どの自身の口から返答を聞きたい。登城とあれば、いずれ時刻までにはこの門へお帰りがあろう。それまで門前を拝借してお待ちいたしておる」

門番では手に余った。表の侍部屋へ告げて、四、五人に来てもらった。そして今が、押問答に揉めているところだったのである。

そこへ帰つて来た又十郎宗冬は、よい機しおに恵まれたように、門番も家来も、その騒ぎにかかつている隙すきを、ついと横から門内へ駈けこんだ。

眼ばやく見つけた綾部大機は、

「誰だ、今行つたのは」

と、後ろで怒鳴つていた。

立ち塞ふさがつていた門番や家来たちは、初めて振向いて、

「御三男の宗冬様だ」

思わずいうと、大機は、

「何、今のが、三男の宗冬どのとか。——然らば宗冬どのに会おう。おてまえ方では、埒らちがあかぬ。宗冬どのに一言、言ことづ伝つてして引揚げてやる」

と、門内へ追おうとした。

「無礼な。どこへ行く」

「おのれ。どうしても、成敗を受けたいのか」

前の者が、大機の胸を衝く。また、左右から利き腕をつかむ。編笠を引きちぎる。――
大機はなお、

「何。成敗する？……よかろう、汝らの手で成敗できるものならいたしてみい。為り損じたら、この檜門が、おてまえ達の血で赤門になるぞ」と、
と、いつのつて去る気色がなかった。

三

家をあけて帰った朝は、父のみでなく、召使らに対しても、宗冬は間がわるかった。

――自分の部屋の障子を引くにも、音を偷んでそつと開けた。冷たい机の前に坐る。火鉢には火がない。机や本箱も、冷ややかに主の行跡を白眼視しているかのように僻まれた。

「だれだつ、その部屋へ這入ったのは」

中庭を隔てた向うの部屋で、突然、こう怒鳴った者がある。その窓は、長男の十兵衛

三蔵^{みつよし}の部屋だった。

「は。——わたくしです」

「わたくしとは？」

「又十郎です」

「又十郎ならよい」

それなり十兵衛の窓は沈黙した。

中庭の坪の芭蕉^{ばしやう}に、黄色い秋の陽が照り映^はえている。秋の小さい蝶が、窓の竹をかすめた。又十郎は机に肱^{ひじ}をのせて俯向^{ふむか}いていたがいつの間にか、お駒の事に囚^こわれていた。

——あの露地から朝出る時は、もう来まいと思い、途々^{みちみち}でも、自責し続けて来たお駒が——ここに落着くともう今でも会いたいように心がみだれてくる。

（そうだ。何も、そう自分の恋を、自分で虐め^{いじ}つけるには当らない。修行は修行でいそしみ、道徳は道徳として当り、恋は恋……。父にだって……。ある。……。四男^{うもん}の右門義春は現に……。わしらとは腹^{はら}ちがい、父の想^{おも}い女^{もの}の子ではないか）

——がらつと、芭蕉^{ばしやう}の向う側で、窓があいた。

「又十郎、又十郎」

兄の十兵衛の声である。

「は。何ですか」

机から顔を上げて、又十郎は、細目にあいていた窓をいっぱいに開けた。兄の十兵衛は、向うの部屋から顔を見せている。

「今帰ったのか」

「え……え、え」

「門前で、何か喧ましい声があるではないか。何ぞ見かけなかったか」

又十郎は、ほっと胸をなでた。父のかわりに、兄から脂を搾られるのかと、実は、返辞にも気が暢びなかつたのである。

で、遽かに、快活になつて、

「なあに、お気に止めるには当りません。毎度見える、貧相な武芸者です。柳生を打込めば一躍、柳生に代つて、天下無双と法螺でもふこうという野心家の手輩でしょう」

「それにしても、騒ぎが長いじゃないか」

「頑然と、帰らないので、家来どもも持て余しているのです」

「ふむ。……又十郎」

「は」

「おまえ行つて、始末してやれ。ちようどお父上は御登城中だ。父上がいてはできないが、おれがゆるす。それ程、強情に申す者なら望みにまかせて道場へ入れ、一撃に撲りつけてやれ」

「はあ」

「はやく行け。……自信がないのか」

「な、なに。多寡^{たか}の知れた……」

「幾つぐらいな男？」

「もう四十を五つ六つ越えておりましょう」

「なんだそんな老武者^{おいむしや}か。はやくして来い。手に余つたら、わしが行つてやる」

せきがんし
隻眼子

そこは北向きで、仄ほのぐら暗くてまた、冷たかった。柱なし何間なんげん四面という板壁板床である。わずかに武者窓から映さす光が、淡い縞目しまめの明りをそこに落している。

「……………」

「……………」

その光り縞のなかに、二つの木剣が、呼吸いきし合っていた。

又十郎の呼吸いきが少し昂たかい。顔は最初の血潮が褪あせて、蒼白になっていた。それに反して、綾部大機だいきの練ねれた体の構えには、まだ何ら不安な兆きざしがない。

門前では気づかなかつたが、ここで見ると大機の横顔には、耳わきから顎あごにかけて、大傷の痕あとがあった。世の中はまだ殺伐さつぱつな遺風を多分に湛たえている。大坂陣以後、二十年とは経っていない寛永十年なのである。戦場傷なら二百石や三百石ですぐ売れ口はつく傷だ。いやその傷一つでなく、面だましいといい、総じてどこか重厚で、これは明らかに、又十郎宗冬の敵ではない。

「御曹子おんぞうし」

大機は、声をかけた。

「——止めようか」

「なに」

「せつかく、ここに立つては見たが、もうやるまでもない」

「だまれ。どこに勝敗がついた。まだ、まだ」

「ああ。それすら分らない坊ンち。打つも張合はないが、但馬^{たじま}どのが帰られるまでの暇つなぎに——お見せしようか。勝負を」

又十郎は肚の底でもう一度（なにを！）といつてみた。自分たち四人兄弟のうちでも、兄の十兵衛^{みつよし}三蔵^{みつよし}をのぞいては、次男の刑部^{ぎょうぶ}友矩^{ともり}にも、四男の右門義春にも、負けはしない。劣っている自分ではない。

二

幼い頃——

まだ四歳^{よつ}か五つくらいな時分。故郷^{くに}の大和柳生^{やまと}の庄の祖父君^{おじぎみ}——門流の人々はそれを、大祖^{たいそ}といつて崇^{あが}めている——石舟斎宗^{むねよし}厳^いから、杖をもつて、あしらわれあしらわれ、

(この孫の骨は悪くない)

と、よくいわれたという自分である。

その後、十四、五歳の頃には、兄の十兵衛をさえ凌いで、あの片目の兄に、口惜し泣きさせた事だつてある。

近頃、多少怠つてはいた。——とはいえ、無名の浪人に敗れるほど、剣を忘れてはいないつもりである。剣の家柳生家の三男だ。敗れては、十年以上も自分を研いて来てくれたこの板の間に対してでも相済まない。

——と思うほど、毛穴が汗ばみ、焦々と、気が逸りかけたが、相手のふところは、洞窟のように、ちよつと測りきれなかった。

(手ごわい！)

と、いつになく硬くなる。相手はじりじり詰めよせる。——又十郎は心のうちで、兄がこの無益な仕合を敢えて自分にさせたのは、意地悪な無言の折檻を自分に加えているのだ——と、ひそかに僻んだ。怨めしくさえ思つた。

押して来る敵の圧力で、来るな、という感じがした。とたんに、かんと彼の木剣は敵の刀を受けていた。離さなかった。手は痺れて何の知覚もなくなっていたが、だだだと、ふ

た足三足、床を踏み鳴らしたまま、えおつと、喚おめいて撃ち返した。

——不覺であつた。

大機はかるく外はずし、又十郎は殆ど足の裏を相手に見せる程、前へのめつて、そのまま板壁まで行くかと思えた。

「坊ンち。見えたか」

大機は笑つた。——が、その瞬間に、差し変えた影絵の人形のように、彼の前にはべつな人物が木剣を提げて立つていた。

三

「……や？」

大機は、身を退ひいた。

又十郎とは何処も似ていない片目の男である。三十そこその年齢らしいが、老成ぶつた顔をして——つぶれている左眼の陰影がよけいそう見せるのかも知れないが——どこか哲人じみた風のある男で、背はむしろ又十郎より低いぐらい。色は黒く、骨ぐみはずつと

太い。

「——当家の長男十兵衛三みつよし蔵でござる。舎弟ではちと、お手甘い御様子。というて、父但馬守は、いかなる道理をつけて参られようと、断じて、お手合せはいたさぬ。……で、それがしが代ろうと思う。御不服はないか」

「む。三蔵どのか」

「……いざ」

「いや！」

と、大機は、ふいに首を振って、

「其そこ許とは試合わん」

「なぜ」

「元々、御子息たちを、相手に望んで来たのではない」

「柳生流は、治国の剣、見国の兵法を本義といたす。ゆえにお止とめり流ゆうでもある。何度い
つても同じ事」

「ではなぜ、諸国に流派をゆるし、諸藩に同流の弟子を」

「うるさい」

「なに」

「そのような世話、汝らにはうけん。帰れっ」

「喧嘩を売るか」

「汝れこそ」
おの

「どこに」

「その眼だ。人の生命を狙っているその眼。察するところ、汝は刺客だ。父上のお命を窺いに来たな」
いのち
しかく
うかが

「——げっ」

大機は、木剣を抛つた。なげう脇差を抜くなり、十兵衛へ突いて来たのである。だが十兵衛の振り下ろした木剣は、大機の頭蓋骨を砕いて、熟れた柘榴のようにしてしまった。くだ
う
ざくろ

仆れるせつな大機が、ギャツ——といった声が、しばらく屋の棟から離れないように耳についていた。十兵衛は、突っ立ったまま、片方の目を二つ三つしばだたくように顔をしかめた。大機の脳骨から刎ね飛んだ味噌のような血の粒が、睫毛や顔にかかったからであつた。は
まつげ

「又十郎」

と、振向いて、十兵衛はいった。

「死骸は、侍どもに取捨てさせればよい。ただその前に、この男の所持品、わけても書付などないか、其方そち自身も手伝うて、緻密ちみつに調べておく要があるぞ。——何かあったら、後でわしの部屋まで持って来い」

ぼだいれんげ
菩提恋華

一

ちゆうしゆう
仲秋

秋はもう過ぎたが、夜ごと、月がよかつた。ずいぶん開けて来たとは見えても、

江戸城の周囲の大部分は、いまだ武蔵野の切れ切れが残っていた。夏は、りんどうや月見草、秋は、撩乱りようらんといつていいほど、空地あきちの萩桔梗はぎききようは露や花を持ち競うきそ。

柳生家の裏も横も、そうした広い空地だった。月の下に、虫が啼くな、鶉うずうが啼く。——夜はその道をよぎる人影もない。

「おや。誰か往来の者でも、供えたのかな……？」

四人兄弟のうちのいちばん末、四男の柳生右門は、露の中に立って——そこだけ草が剥はげて、土饅頭どまんじゅうのように少し盛り上がっている地面へ、身を屈かがめながら呟つぶやいた。

石が一つ、置いてある。

その前に、香華こうげが供えてなければ、野原の小さな起伏の一つとしか見えないが、前にも誰か、備前の小徳利に何か供えてあるし、右門も今、香華を持ってそこへ来て踏みしやがこんだのである。

「……………」

朝に夕に——という程ではないが、時折、右門はここへ来て、一片の称しょうみ名ようを念じていた。

といって、地下の仏と、右門とは、何の縁故もつながりもあるわけではない。土饅頭の下に眠っているのは、後月あとげつのちようど今日、兄十兵衛の木剣のために、道場でただ一打に撃うち殺ころされた浪人の綾部大機の亡骸なきがらだった。

——あの時。

兄の十兵衛は、部屋へもどると、あの手を洗いもせず、茶を啜すすっていたが、家来たちが、裏門から死骸にを担にない出すのを見ても、右門は身ぶるいが出て、

(だから、片目がつぶれたりするのだ)

と、兄の殺生を——残忍を平氣でいる容子を——忌わしくも憎くも思った。

(いやだ、ああいやだ。どうしてわしは、武芸の家などに生れたのだろう)

簀の子巻にした死骸を、海口へ捨てにでも行くらしい家来たちを追いかけて、大機の亡骸を、彼が強い、この空地の一隅へ埋葬させたものだった。

だが、彼のほかには、誰あつて、そこへ花一枝、水一杯ささげる者はない。

右門は、自分で石を転がして来て、その上へ乗せた。野良犬が掘り起したりなどするからである。そして時々、石を訪れた。

「……………」

そこに念誦している右門の姿を、家来達は度々見かけた。右門は、自分のしている事は、兄の罪ほろぼしであり、殺伐な一門の後生の為であると信じていた。

家来がそれを、ある時、十兵衛に告げると、十兵衛は、片眼の落ちた顔に、実におかしそうな皺を湛えて、

(そうか。それは右門には、よい手鞠が見つかったな。あれはちょうど、鬱気な猫みたいに、いつも眸が空虚な男だから——)

と、笑った。その後もひとりで思い出しては笑っていた。

二

自分だけが妾腹の子という——幼少からの負目ひけめが、自然彼をそうさせたのかもしれない。

——右門の眸は、十兵衛が嗤わらうとおり、人に対して、いつも弱々しかった。

体も、丈夫ではない、腺病質せんびょうしつの方である。

その点では、次男の刑部友矩ぎようぶともりのと、よく似ている。気性も友矩といちばん合う。だが

次男友矩は、家光の寵童ちようどうとなつて、柳營の小姓組に上がっている。年に何度という程

しか屋敷へは戻つて来なかつた。

我が昔しやく所造しよぞう諸悪業

皆かい由ゆう無始とんじんち貪瞋癡

従身語意之所生ししよしやう

いつさいがこんかいさんげ
一切我今皆懺悔

——右門は今、無縁の石に向つて、掌てをあわせながら、口の裡で何度も唱えていた。生

れつきの仏性というのか、写経していたり、こんな瞑目^{めいもく}の境にある間が、いちばん自分の魂が、在るところに在る心地がした。

「……？」

おや、とその瞑目を四辺^{あたり}へ開いて、右門は不審な顔をした。

ぷーんと、酒の香がそこから匂^かつて来るのだった。酔いどれでも近くに倒れているの
と見廻したが、そんな人影もない。

「……あ。これか」

やつと彼は、謎が解けた。石の前に誰が供えておいたか小さな備前徳利の口から霧^{きり}のよ
うに立つ香^かりにちがいがなかった。

——それにしても、誰がこれを？

と疑いながら、右門は徳利の口を嗅^かいでみた。酒の香はたった今、杉樽^{すぎだる}から移したよ
うに新鮮である。

「はてな？ ……」

偶然、彼の眸^{くさむら}が向いた草叢^{くさむら}から、がさつと、逃げるように人影が起った。背よりも高
い尾花の後ろである。

「誰だつ」

恐かつたのは、先よりは右門だつたのである。思わずそのせいで声が癩かんだか高く走つた。

「……は、はい」

意外にも、女の返事である。右門は側へ行つてみた。そして再び身慄みふるいに襲われた。なぜならば、藹ろうやかに化けた女狐めぎつねのように——草の根に顫おのいていた女は、野で見るとは、余りに美しい。

襟えりすじの白さ、銀釵ぎんさのかすかな慄ふるえ、帯の光——月の下とはいえ眼に痛いほど沁しみみ入つて来る。十九か二十歳はたち。そして良家の子女であることはいうまでもない。

「何をしておられた」

「お見遁みのがし下さいませ」

「捕えようなどとする者ではない。わしは柳生家の四男右門だ」

「存じあげておりまする」

「知っている？」

「はい。いつも、泉下の仏にお優しい御回向ごえこうを、陰ながら有難いと伏し拝んでおりました」

「あつ。では其女そなたは……ここの土中に葬られてゐる大機という者と……何か有縁うえんのあいだ

からだの」

「え。……あの、由縁ゆかりのある者ではございますが」

「大機は、酒が好きだったのか」

「ほかに楽しみのない人でございました。ちょうど今日が、家を出た命日。そつと生前好きなた酒を手向たむけておりましたところ、あなた様のお越しにうろたえて、こんな所へ身を隠したのでございました」

「さて、よほど親しい間まだの。其女そのなの父か」

「いいえ……滅相めつそうもない」

「では叔父か」

「そればかりは、どうぞ何もお訊きくださいますな」

俯伏うつぶせていた身を起すと、女はふいに、草叢くさむらの陰を出て、あつと眼を瞠みはっている間に、月の露と、虫の音を衝いて、八重洲河岸の濠端ほりばたの方へ駈け去ってしまった。

十兵衛の部屋、又十郎の部屋、右門の部屋——こう一棟の下にいる兄弟たちの窓は、芭蕉しやうの中庭を隔てて、三方から向い合っている。

だが、塀が高いので、邸のうちからは、裏の空地は見えなかった。

右門は、日が暮れると、書庫の上にある中二階の小部屋へ上がっていた。そこから原が見える。月の夜は、冷たいあつめの石が、露にぬれて土饅頭どまんじゅうの辺りも見える。

そして、

「——今夜は」

と、夜ごと、人待ち顔を、そこに更ふかしていた。

女は、あれから後も二、三度、石へ詣まゐりに来た。

その都度、右門はすぐ、裏門から空地へ出て行つたが、彼が土饅頭の側まで行くと、もう女の影は、どこにも見えなかった。芒すすきの陰にも、あれからは隠れていなかった。

（名だけでも、なぜ聞いて置かなかったか）

軽い悔いもとの下に、何か強い執着が首を擡もたげていた。それはあれ以来冷めない火のように、彼を絶えず焦いらいだたせていた。

中庭の芭蕉ばしやうに、黄色い灯影ほかげが流れた。がらりと、障子を明けて、濡れ縁に人影が立つ

た。十兵衛みつよし三蔵である。障子の隙間から、兵書や禅書を散らした机が見える。

「こよいもいい月だな。もう後の月のちつきか」

独り呟いていた十兵衛は、向う側の窓を見て、

「又十郎、又十郎」

と、呼んでみた。

燈あかりは灯ついているが、返辞はない。十兵衛は舌打ちならして、

「蝙蝠こうもりは、また留守か。……しようのない奴」

苦笑して、今度は、

「右門。右門はいるか」

と、末弟を呼んだ。

兄の影を見たので、右門はあわてて中二階を降りていた。

「はい。右門はこれにおりますか」

「廊下か。来るには及ばん。裏の原へ出て、月見をせぬか、月見を」

「よろしゅうございますな」

「昼間、仲間ちゆうげんどもが、網を打って、鶉うずらを十羽も捕ったという。芋田楽いもでんがくに、鶉でも焼

かせて、一^{いっこん}献酌^くもうではないか」

四

酒は好きでなかったが、兄の機嫌を損じてはと、

「では、支度させましょう」と、右門は先に、戸外^{おもて}へ出て、若党の佐田承平と、仲^{ちゅう}間^{げん}の六助とを呼び立てた。

「昼間捕った鶉があるか。あつたら、裏の原へ、蕨^{むしろ}を敷いて、田楽焔炉^{こんろ}に炭火をつぎ、芋^{いも}や串^{くし}肉^{にく}を焼くようにしておけ」

「誰が召上がるんで」

「兄上だ」

「十兵衛様ですか。かなわねえな」

承平と六助は、顔を見合せて、頭をかいた。自分たちの寝酒のさかなにするつもりなのであつた。

月の下に、一枚の蕨が敷かれた。

十兵衛はやがてそれへ来て、弟の酌で飲み始めた。

「どうだ。おまえも一杯ひとつ」

「私は……」

「不自由な奴。相変らず飲めんのか」

「すぐ咽むせてしまうのです」

「又十郎と半々になるとちようどよいに。……又十郎といえば、あいつは二刀流だな。わしは眼も一つ、好きも一つだが」

「お戯たわれを」

「お前と飲んでいると、他人と飲んでいるようだ。酒は魂と魂の接触、お互いの血が交流するところに味のあるものだが……」

血潮の事をいわれると、右門は、さし俯うつ向いて、涙ぐんだ。十兵衛には、彼の感傷にあるような細い神経はないのだが、右門には、種さまざま々な悶もだえや僻ひがみが当然胸を塞ふさいでくるのだった。

「はははは。右門、おまえは酒呑みじゃなかったな。おれの言葉は無理だったかも知れん。——だが、もう少し日常快活に暮せよ。野望を持てよ。剣道が嫌いなら嫌いでいい。何か、

政治に心を燃やしてみるとか、禪をやるとか、軍学を究めてみるとか」

「禪門に入ってみたいと思っております」

「よからう。だが、禪とは、大悟のことだ。おまえみたいな小胆者では、大悟はおろか、迷つて見ることもできはせぬ。——まあ、養子の口だな。お父上も心がけておるらしい。いい養子先があつたら行く事だ」

十兵衛の無関心な放言は、右門が日常、針を抱くように考えつめていた事ばかりだった。それへざらざらと触るのである。月の筵は彼には、針の筵だった。

五

右門は江戸で生れたので、家来の話に聞いたただけであるが、この長兄の片目になった原因は、七歳か八歳頃の事、柳生城の藪で悪戯をしていて、殺ぎ竹で目を刺したのが因だということであつた。その時、泣いて帰つて来た十兵衛に、祖父の石舟斎が、

（侍の子が、殺ぎ竹で目を刺されたなどは、恥とこそ思え、泣くどころの沙汰か。わしの孫にも、こんな意気地なしが出来よったか）

叱られて、退くと、幼い十兵衛は、やがて自分の居間で、朱あけになって昏倒こんとうしていた。家臣が驚いて抱き起してみると、殺ぎ竹で傷つけた眼を、自分の手で小柄こづかで抉えぐり抜いていたというのである。

——そういう気性を幼少から持っていた長兄である。右門は、一つ棟に住んでいるさえ、絶えず妙な威圧をうけた。同じ恐いにしても、父の但馬守たじまのかみには、愛が感じられるが、この長兄はただ恐ろしいだけだった。

「ああ、酔うたなあ。右門……鼓つづみを取って来ぬか。おぬし、猿楽さるがくを舞え。……何、舞えん。然らば、鼓を打て、わしが舞うてみせる」

「兄上。こんな所へ、横におなり遊ばしては、体に毒でござります。薙むしろも夜露に、じつとり湿しめっておりまする」

「樹下石上は、乞食と武芸者、どちらも馴れておらねばならぬ。……ああ、月天心てんしん。この月を見ていると、天下は泰平、風を孕はらむ不平ともがらの輩もないようだが……」

酒を取りに行つた仲間ちゅうげんの六助が、その時、彼方で、何か大きな声を出した。

「あつ。大機を埋いけた跡へ、またいつもの綺麗きれいな女が……？」

ふと、耳に止めて、右門はすぐ、

「えつ、女が」

と、^{むしろ}蕨から起ちかけた。

横に寝転んでいた十兵衛は、弟の袴を^{はかま}掴んで、

「右門。どこへ行く」

——そして彼方に^{たたず}佇んでいる仲間へ、大声で吩咐けた。

「六助。つかまえて来い。この辺りには、女^{めぎつね}狐がよく出る。逃がすなよ」

六助は、抱えていた酒壺を、草の中において、土饅頭^{どまんじゅう}の方へ駆けだした。

女は、すぐ^{けど}気取った。六助が近づかぬうちに、原を斜めに横ぎって、大名小路の方へ走り込んだ。六助も、途中から向きをかえ、何処までもと、追って行つた。

摘んだ^{のぎく}野菊

一

「——坐れ。右門」

「はい」

「おれは知っている。あの大機の墓石へ、足しげく回向えこうに来る女と、おまえは親しくしているな」

十兵衛は、莚の上に坐り直している。右門の顔は、月より青かった。

「親しく、親しくなどした覚えはありません」

「きつとか」

「ええ。誓つて——」

「ならばよいが」

と、十兵衛は、声を落して、いつものような語調に返った。

「女はいずれ、大機の身寄りの者だろう。——ま、それはよいがだ。あの子部大機とは何者か、そちは心得ておるか」

「詳しいことは存じません」

「佐竹の家中に縁者があるの、北陸の者だのいつて来たが、真つ赤な嘘だ、肥後訛ひごなまりがあるなど、わしは睨あらたんでいた。案の定、死骸あらたを検めてみると、懐中ふところには祖先の系図や、遺書など所持していた」

「遺書を……ですか」

「さればよ、死ぬ気で、柳生家の門へやって来たのだ。お父上の但馬守を主家の仇と呪い、是が非でも、父上に近づいて、刺し交える覚悟で来た漢よ」

「解せぬ事ではございませぬか……。お父上に対して、肥後浪人が主家の仇などとは」

「所謂ない事ではない。父但馬守は、過ぐる寛永七年この方、新たに設けられた幕府の職制、大目付という要職に就かれて、剣道師範役を兼ねてお勤めになっておられる」

「存じております。家光公の御信任あつく、お父上も御辞退しかねて、当時よほどな御決心でおうけなされたとかで……」

「嫌な役だ。誰でも逃げたい憎まれ役なのだ。……なぜといえば、大坂落城以来、徳川家に隨身してきた大名のうちには、肚からの隨身でないものが幾らもある。また御政治の方針からいっても、大藩の封地は、できる限り、削り取るか、取潰すか、せねばならぬ。その大きな後始末が残っている」

「——で、大目付の役が、新たに設けられたわけですか」

「外様、譜代を問わず、諸侯の内秘や藩政の非点をつかんで、これを糺問に附し、移封、減地、或いは断絶などの——荒療治をやらねばならない当面の悪役が大目付じゃ。お

父上でなければできぬ。御上命のあつた際、父上は恐らく死を決しておひきうけ召されたに相違ない。——以来芸州の福島正則まさのり、肥後の加藤忠広を始め、駿河大納言家するがだいながんにいたるまで、仮借かしやくなく剔抉ていけつし、藩地を召上げ、正則も配流はいりゅう、忠広も流罪るざい、大納言家も、今、御幽閉させて、上意を待たるお身の上だ。……そのほか大小名、滅地移封の目に遭つた者は皆、將軍家を怨むよりは、大目付の辛辣しんらつをうらんでおるに相違ない。——綾部大機もその一名なのじゃ」

「……あ。それで」

「わかつたか」

「怖ろしいことでございます」

「恐れるには足らん。しかし、もし大機が父上に近づいていたら父上とて、どうなつたか分らん。いかに達人でいらつしやつても、死を極めた奴にはかなわぬからな」

「そうとは知らず、あわれを思つて、死骸を葬ほうむつてやつたりなどしましたが」

「そこはおまえのいいところだ。白骨になれば、われらみな同魂同性。……だが、あの墓石に近づく身寄りの者とあれば、いわゆる怨みも重かさんで二重の遺恨をふくむ者と視みねばならぬ」

「……………」

「右門。気をつけろよ」

「……はい」

右門は慄然^{りつぜん}として、兄の諭誠^{さとし}に、首を垂れた。

と。その時、空地の遠方から、

「若様つ。十兵衛様。……捕まえました。捕まえて参りましたぞ」
と六助の遠い怒鳴り声が聞えて来た。

二

眼の前に引きすえられた彼女を見て、十兵衛は、意外らしい顔をした。その美貌と、身ごなしの可憐^{しおら}しさに、眼を瞠^{みは}つたのである。

もう観念したものか、いつぞやの夜とちがって、十兵衛のいろいろな詰問^{きつもん}に、お由利^{ゆり}は、悪びれずに答えた。

「——決して、父親の身寄りのと、そんな縁故ではございませぬ。大機さまと私とは、あ

かの他人でございます。ただ、一つ長屋に住んでいて、私の父が病死する折、お世話になった御恩があるので……柳生さまのお邸で、仕合しあいに行つて死んだと聞き、ふだんお酒が好きだった事など思い出し……お屋敷の往き歸りに、花でもあれば上げたり、時にはお酒など上げに來たまででございます」

可憐かれんな小娘おののの顫ふるき声には、何の邪推じやすいも起らなかつた。一徹であるだけに、十兵衛は感動しやすい。殊に、自分が酒を嗜たしなむだけに、酒好きな死者に、酒を手向たむけたという小娘らしい気もちが、ひどく欣うれしくひびいた。

「家はどこか」

「薬研堀やげんぼりでございます。あの薬師様の裏通りで、糸間屋の持長屋もちながやに住んでおります」

「お屋敷の往き歸りに——というたが、武家奉公か」

「榊さかきばら原様のお奥へ、お針子に通つておりますので」

「親は、浪人者か」

「父親はもう……」

「うむ、病んだといったな」

「はい。死ぬ時、なぜか、侍の妻にはなるなど、遺言ゆいごんにいいましたが、わたくしは町人

ぎらいで、やはりどうかして、武家の家内になりたいと、叔父、叔母にかくれて、お針部屋に御用のない時は、町の道場へ通っております」

「なぜ其女そなたの父は、侍の妻になるなどいつて死んだのか」

「御主君の末路やら、自分の末路やら見て、そう考えたのでございましょう」

「さてはやはり、没ぼつしゅう収しゅう大名の家来だったか」

「わたくしは幼くて、よう存じませぬが、福島様の家中の端で、百石とか取っていた侍と聞いておりまする」

「今、身を寄せておる家は」

「叔母の家におります。けれど叔母は、世馴れた人で、これからの世間は、何んでも金を持たねばならぬ。……などといって、わたくしに、三味線を習えの、金持の人に近づけのと。……死ぬほどそれが辛うてなりません。大機さまが生きているうちは、大機さまの家へ逃げこんで、叔母に意見をしてもらいましたが、もうそのお人もないし……」

十兵衛は後悔した。よしない話を深問いして、かえって酒が醒さめてしまったからである。彼は、小娘の純情が、可憐いしらししくてならなくなった。

「奉公に出る気があるか。もし屋敷勤めでも望むなら、召使って遣わすほどに、日を改め

て、訪ねてくるがよい」

放して帰す前に、十兵衛はそういった。そして途中が淋しいだらうからといって、若党の承平に町の灯の明るい辻まで、送って行つてやれなどとも吩咐いいつけた。

びんしも
鬢の霜

一

眼には見えない。眼に見える世相は、泰平というしかない。だが何となく、人心のうちに、不安がある。松の内らしい鼓つづみの音や、神楽笛かぐらふえは町を流れていたが、その音のどこかに悲調がこもっていた。

「年暮くれに迫つて、とうとう駿河大納言様も、御切腹を迫られたそうな」

屠蘇とその香の中に、そんな囁ささやきが町で交わされている。暴君という世評こそあれ、現將軍とは血をわけている間がらの一門の人——その大納言家すら、幕府の確立というためには、犠牲ひそにされるのかと思うと、庶民はお互いが、大名でなかった事を、むしろ密かに祝福し

た。

もつとも、町人でも三代目という。徳川が今その三代將軍の世だ。しかも秀忠の死後、家光が將軍職を受けついだから、まだ年月は浅かった。

幕府三代、武家の覇業はぎようとしたら、もうこの辺でぐらついていい所である。諸国の雄藩も、決して現状に甘んじてはいない。まして、もういちと大乱あらば——と雲をのぞんでいる長刀の武夫ますらふは、山野に数かぎりなくあるし、一藩のうちにも、沢山ある。——泰平と見える世情の裏に、ただそれらの人々が時を計って、沈黙を守っているだけに過ぎない平和なのである。

不安は、一般ばかりでなく、幕府自体が抱いていた。いや幕府自身からそれを醸かもしているくらいなのである。例えば、閣老の土井利勝としかつは、自身、謀首ぼうしゅとなったような顔して、列藩の諸侯へ、謀叛状むはんじょうを送り、その手応えで、諸侯の肚はらを打診したという——奇怪なうわささえ巷間こうかんに洩れていた。

間もなく、大名の妻子は、国元に置くべからず——という令を発して、その骨肉を江戸へ持った。

また、参覲交代さんきんの制度を厳密にした。また、安宅丸あたかまるその他の巨きな兵船おおを造らせた。

また、武家法度をやかましく宣布した。また——大目付の職制を新たに設け、諸国に無数の隠密を放った。

これでは、大名たちも、神経質にならずにいられない。諸藩の動揺や自粛は、すぐ庶民に反映した。その上、福島、加藤などの大藩の没落、大納言の自滅——。

無数の浪人がそこにできた。禄を離れ、主家を離れ、到る所で、

(乱になれ、乱になれ)

と、反幕的なものを醸し歩いた。

殊に、柳生家の白壁の塀には、

俗劍佞智流

だとか、

剣ヲ穢ス劍家

禄ヲ糞^{ロク}城^{フンジョウ}二積ム

だとか。また、

幫間^{ほうかん}流のお家元

強い敵にはお止流

などと落書したり、

衆しゅうえん 怨のろ 集財

と呪のろつたり、そのほか辛辣しんらつな悪口や呪咀じゆそが、消しても消しても、何者かが書きちらし
て行つた。もちろんその筆蹟や辞句から見ても、町人の悪戯いたずらでないことは明白だった。

二

但馬守宗矩たじまのかみむねのりは、毎夜、疲れて歸つた。

もう彼も六十余歳である。——でなくとも今の難局に、大目付を四年も勤めれば、心労
だけでも、疲れるほうが当然であつた。

松の内は松の内で——それが過ぎるとまた政務で、明るいうちに邸へ歸つたことはない。

「お歸りなさいませ」

「お歸り遊けにんばしませ」

出迎える家人達の間を通つて行くにも、頷うなずくだけで、自然口が重くなる。——黙つて、

奥の——息子達の部屋よりもう一棟奥の、居間に坐る。

「寒い……。風邪かぜ気味かな」

呟ひとしきいて、一頻せきこり咳せきこ込む。

その前に、一いちわん碗わんの柚湯ゆずゆをすすめて、若い小間使が、彼の背うしろへ廻まわった。

やさしい手が、背せなを撫なでているうちに、咳せきが鎮しずまった。

但馬守は、柚湯を取り上げながら、ふと、見馴れぬその小間使に、

「誰そなたじゃ、其女は」

「はい。由利と申しまする」

「新参か」

「去年の十月末、御奉公に上がり、二ふた月つきの下勤しもづとめをいたしまして、このお正月から、

奥の御用をさせて戴いております」

「幾歳いくさいだな」

「十九になりました」

但馬守はそれなり沈黙していたが、用人の笹尾喜内ささおきないが、

「若殿たち、書院にお揃いでございます」

と、告げると、そうかと頷うなづいて、更衣部屋こういにかくれ、老女の世話で、衣服きを着きかえると、

やがて奥書院へ歩いて行つた。

十兵衛と右門のふたりが、並んで坐つていた。

「又十郎はいかがいたした」

但馬守は、着座するとすぐ、不機嫌にそれを十兵衛に詰問^{なじ}つた。十兵衛は、嘯^{うそぶ}いて、

「何処へ出ましたやら」

と、答^そえを外らし、

「御休養の暇もなく、父上にも、御疲労にございましょう」

「天下のお為と思えば、この老骨の死花。疲れは厭^{いと}わぬ」

「ですが、大目付などと申すお役目は、自体、お父上の人柄にはないものでしょう。それに柳生家は、劍の家です。醜^{みにく}い葛藤^{かつとう}や術策や政争の中に、可惜^{あたら}、老後の晩節を台なしに遊ばしてしまわぬよう——十兵衛はそれを祈りまする」

「分つておる。だが、一身を顧みておられぬ場合だ」

「お父上が当らなければ、誰かが出て、難局に当りましょう。優^{すぐ}れた劍人は、一世にそう何人も出るものではないが、なかに、大目付ぐらいやる政道家は、箕^みで掃くほど代りがあります。よい加減に、御退役なされてはどうですか」

「それができるくらいなら」

「なぜできませぬか。お父上こそは、祖父石舟斎宗嚴せきしゅうさいむねよしから、新陰しんかげの極秘と柳生の正統を、並び授けられて大成なされた——唯一無二の現今の劍宗ではござりませぬか。將軍家に仕える道も、それを以てなされば、それ以上の御奉公はない筈と存じますが」

「いや、そちのいうのは、小乗の劍だ。柳生流はそうでない。わしが十三歳の頃、父の石舟斎宗嚴に手を曳かれ、初めて陣中で家康公に拝謁はいえつした時、父の石舟斎は家康公の間に答え——柳生流は大乗の劍をもつて本旨とするとお答えなされた」

「大乘小乗も臨機でございましょう。諸流百派、劍は皆一道と心得ますが」

「が、柳生流の極意は、無刀だということを、そちももう悟さとっておろうが。——無刀とは、泰平の体。泰平の策は、治国にある。されば、わが家の兵法は見国の機を悟り、治国の太刀たるところにある。將軍家へもそう御指南申しあげて来た。家康公が、秀忠公の師にと、わが家をお取立てになられたわけも、柳生流のそこに御信任をかけられたからだ。——今、三代家光公の治世となり、天下再び大乱の兆きざしある時、平常、治国の平常を説き、お上の師範たるわしが、この難局を、よそ事に見ておられようか。——もしわしに今のお役目が勤まらぬ程なら、柳生流の極意ぎょくいは死物となるのだ」

久しぶりに十兵衛は、父の血色に壮者のような紅味あかみを見た。しかし云い終るとすぐ、鬢びの霜しもをそそげ立てて烈しく咳せき入った。その姿を見るとまた、消え際の灯のいっさん一燦さんのような、悲壮なものに十兵衛は胸打たれた。

三

……そのまま、しばらく黙り合っていた。

やがて、父の咳声しわぶきのおさまった容子に、十兵衛は語をかえて、

「時に、何か御用ではございませぬか。右門と私に」

と、ここへ呼ばれた父の用向きを促した。

「うむ、やはり余の儀ではない。御奉公に就いての事だが——」と、但馬守は、口に当てていた懷紙たもとを袂たもとに落しながら、

「又十郎がおらぬが、又十郎は其方そちから後で伝えてくれい。最前からも申した通り、わが家の流は治国安民を道とする兵法じや。この父に協力して、そち達にも、御奉公を手伝ってもらいたいのじや」

「手伝えと仰つしやいますと」

「又十郎も其方そちも、わしの手足となつて、わしが行けという地方へ数年武者修行に出て欲しいのだ」

「つまり……隠密的な命を帯びてですな」

「まあ、そうじゃ」

「行く先は」

「九州一円——わけても肥前、大村、天草、島原の辺り」

「火の手の揚がりようによつては薩摩さつまも危ないものでございますな」

「其方そちも感じておったか。諸州の浪人や豊臣の残党などもだが、邪宗門さぐわいに口を藉かりて、土豪土民をあつめておる様子。——長崎奉行あたりの報告では、些細ささいに申しおるが、宗門と武力が結びつくとなれば、これは捨ておけぬ大事となる。どうだ、行つてくれるか」

「十兵衛には、異存いそんございませぬが、又十郎は、何と申しますやら」

「否いなとは云わさぬ。そちからも屹度きつと申せ。又十郎の身状、平常黙つておるが、知らぬ父ではないのだぞ」

「母上が御在世ならばと思うのでござります」

「ばかな。又十郎とて、子供ではなし」

「いやかえって、他国へ修行に出れば、彼にはよい転機と相成りましょう。……しかし、参るとなれば、五年七年の遊歴は覚悟いたさねばなりませぬが、その間、お父上の身辺には」

「右門がおる。右門を残しておこう。病弱でもあるし……」

十兵衛は横にいる弟を見た。父の眼も彼に注がれていた。右門は先刻から一言も云わず、ただ俯向いて畏まっていた。

父は、四人の兄弟中で、誰よりもこの右門が不憫でならなかつた。そして最も好きでもあつた。十兵衛のように、又十郎のように、右門は逆らつたり心配させたりした事がないからである。

紅梅を繞つて

又十郎がうんと云わないので、父の但馬守へする返答は遅れていた。けれど、十兵衛自身は廻国に出る決心をしていたし、又十郎の我儘も、今度は通させないつもりで肚に畳んでいた。

中庭の坪には、芭蕉ばしやうの葉は落ちたが紅梅が咲いていた。

その中庭へ向いている三つの窓の、それぞれの部屋に、今日はめずらしく、兄弟三人とも、机よに倚よっていた。

廂越ひさしごしに、春の雲が麗うるわしい。

又十郎の部屋の窓は、半分ほど開いている。向う側の十兵衛の部屋の窓は、いっぱい開けひろげてあった。

独ひとり閉しめ籠こんでいるのは、四男の右門の部屋だけである。

（――怒っているにちがいない。おとといも、行かずにしまったから）

又十郎は、頬杖ついて、お駒と向い合つて痴話ちわでもしているように、お駒の表情や云い草までを、空想していた。

（いっそ、怒らして、仲違なかつがいして切れようか。そして兄が云うように五、六年眼をつぶって、廻国修行に出る）

そう考えたが、彼には到底、剣で生涯を立てる気にはなれなかった。柳生家は兄が継ぐ。当然自分は、分家して、他藩の指南番か何かに抱えられて、その大名の国元へ赴任して行く――

（一生が見えている事あつまらねえ！）

又十郎の呟きは、どうしてもそこに落ちるのだった。かなり自由な家庭だし一万石という家の三男に生れ、都会的な遊びや風潮には、兄弟中でもいちばん染まっている彼である。粋で伝法な市井の風俗を好んで、父や兄にいくら喧ましく云われても、袴が嫌い、着流しで出るといった風な彼だった。

もつとも、今流行っている隆達節にも。――君と寝ようか、五千石取ろか……というあの唄が、武士の中にさかんに謡われている時代だから、又十郎と似た考えでいる者は、彼のほかにも巷にはいくらかもあるかも知れなかった。

「おや？ ……兄貴が何かやっているぞ」

庭木を隔てて見える向う側の十兵衛の部屋へ、又十郎はふと眼を向けた。そして苦笑を湛えながら、机にのせていた肱を、窓縁へ移して、頬杖をかいながら眺め入っていた。

二

十兵衛は、いきなりお由利の手をつかんで、そして離さなかった。

茶を運んで来て、彼女が退がろうとした弾はすみにであつた。

「あれ……そんな事を遊ばしてはいけません。……滾こぼれます、お茶が」

「なぜ逃げる」

「逃げはいたしませんけれど」

「ならば、おとなしく、もつと寄つて坐れ。話があるのだ」

「……でも。……でも」

「誰に知れても関かまわぬ。わしは、恋はするが、不義はせぬ。何も人目を憚はばることはない。

十兵衛はそちが好きだ」

「ま。……そんな」

「顫ふるえておるな。わしがこんな片目の醜ぶおとこ男ゆえ、恐いのか」

「いいえ。……そんなわけではございませぬが」

「然らば、返辞を聞かせい。いつぞや、十兵衛が遣つかわした恋歌、解けたか」

「……………」

「そちは、この十兵衛が、好きか嫌いか。好きならば好き——嫌いならば嫌いと申せ」

「……おゆるし下さいませ。手が痺れて痛うござります」

「離してやる。……だが、正直な返答をせぬうちは、ここは出さぬぞ。まだ、急な事ではないが、十兵衛はやがて諸国遍歴^{へんれき}に出て、短くとも、ここ五、六年は帰らぬ身じや。そちさえ嫌でなければ、百年^{もも}の誓いをして立ちたい。また、厭^{いや}なものならば——ぜひもないが」

障子はいつぱい開^あいているし、十兵衛の声は大きいのである。紅梅^{れんぎ}の連翹^{しょう}だの、庭木はそこを遮^{さへ}ぎつてゐるが、又十郎の部屋からは、手に取るような一間^{ひとま}だった。

「……浮世絵だなあ、まるで。……兄貴^{うれ}にも、あんな欣^{うれ}しいところがあつたのか」

又十郎は、にやにやしていた。

——だが。

そう二つの部屋をつないでゐる横の長い棟の——先刻^{さつき}から寂^{しん}と閉めきつてゐる窓障子の一室には、四男の右門が咳^{しわぶき}声もしていなかった。

三

「……………」

右門は指の細い手を左右の顚顚こめかみに当てて、朱机に俯向うつむいていた。朱い漆うるしの上に、涙が落ちていた。

窓の外から聞えて来る兄の声を、聞くまいとして先刻さつきから書を繙ひもといたり、香盆こうぼんを拭いて香炉に火を点じてみたりしていたが、十兵衛の声が耳に聞えている時よりも、聞えていない間の方が、堪たまらない不安と焦躁しょうそうに駆られてしまう。

きようばかりではない。

長兄あにがお由利に対して、想いを示すことは、余りに露骨だった。どうかすると、この自分自分がいる前でも、びつくりするような事を突然云う。

（お由利は自分の気もちを知っていよう）

右門はそう思つて、彼女が、努めて長兄あにの側に寄るまいとし、長兄を嫌っている風さえるのを、やや心の慰めとしていた。

けれど右門には、長兄あにの心が分つてみると、その長兄と恋を争う気にはとてもなれな

った。そういう恋の敵手^{あいて}がないにしたところで、彼には、彼女へ、面^{むか}と対^{むか}つて、

(恋——)

という一語さえ言葉の中に用いることができないくらいだった。

——今になって考えてみると、右門は自分の愚^{おろ}がわかる。お由利が屋敷に抱えられて来た当時、無性な欣^{うれ}びにその半月ほどは、まるで子供が欲しい小鳥でも買ってもらったように、彼女と同じ軒^{のき}下^{した}にある身を、独り密^{ひそ}かに祝福^{しゅくふ}していたものだ。

長兄^{あに}がお由利にやった恋歌も読んでいる。お由利がそれを丸めて捨てたのをちらと見て、後から拾い取って見たのである。——狗^{いぬ}のような、と彼は自分の浅ましい行為にも泣いた。思えば、自分が生れてから初めての幸福は、彼女が屋敷へ来てからの十五日間に尽きたいたかも知れない。それが生涯のただ一つの記憶として残るだけの事であろう。

「……あつ？」

長兄^{あに}の部屋の方で、何かやや大きな声と、物音がした。右門は思わず、閉まっている窓の障子^{すが}へ縋^{すが}つて、そこを開けようとしたが、

「……いや？」

と、それすら勇気を欠いて、独り苦しんでいる彼であった。

ばたばたと、誰か廊下を小走りに来る。お由利か？——と右門は青白くなって耳をすました。すると、襖ふすまの外で、

「又十郎様、右門様。御次男の刑部ぎようぶ友矩ともり様が、お越しにござりまする」

爺やの声である。爺やとは老用人の笹尾喜内ささおで、兄弟たちには、少しも恐いところのない好人物なのである。

「お。……御城内の兄上が見えたとか」

右門はすぐ立った。——が、指でまぶた瞼の腫れを抑え、衣紋えもんを直してから迎えに出て行つた。彼には、兄弟中で誰よりも親しめて、そして一番気のあう刑部友矩であつた。

四

「爺じい、いつも達者だのう」

若党や小僧や、大勢の召使が式台に出迎えたが、頭ずの高い刑部友矩は、目もくれなかつた。

ただ用人の喜内老人だけには、そう言葉をかけた。幼少の頃の友矩には、癩癰てんかんのよう

な持病があつて、この老人には、そんな世話をやかせた事だの、寝小便の癖までを、知り抜かれているからである。

だが、今は家光將軍の寵童ちようどうであり、小姓組では羽振りはぶがよいし、服装は綺羅きらで、容姿は端麗たんれいな彼だった。奥女中のように柳營にばかりいて、絶えず將軍家の身近くいるところから、大名たちにも頭構えずの高い癖がついているので、稀《たまたま》、宿下がりかお使いで城外へ出ると、やたらに人間どもが賤いやしく見えてならなかった。

「お、兄上、おめずらしゅう」

と、後おくれて出た右門が、廊下の途中で迎えると、

「ウム、皆もおるか」

と、友矩ともりはそのまま客書院へ通つて、ずっと上座へ坐つた。

「きようは、御内意によつて、他へお使いのついでに寄つたのじゃ。来月、浜書院で上様のお船遊びが催される。その折、兄弟どもも皆、誘えという御詫ごじやうじゃ。——但馬守に伝えても遠慮するであらうゆえ、そちから申せと、わけても有難い仰せなのだ。——又十郎はおるか」

「おります」

「兄上十兵衛どのは」

「おられます」

「右の由を伝える程に、これへ呼んで貰いたいな」

家庭に帰つて来ても、友矩は柳營の官僚くさいのが抜けなかった。右門には、そんな臭^く味は氣にならない。唯々^{さみ}として呼びに行つた。又十郎はすぐそこへやつて来たが、長兄^{あに}の十兵衛は、

「用事があるならわしの部屋へ来い」

という返辞であつた。

「それは当然だ。怒らせさえしなければ、氣のいい兄貴。ちよつと挨拶して来た方がよいでしょう」

又十郎は側から勧め^{すす}めた。友矩は、上様の内意^{うちい}だとか、何とか、理窟^{りく}を云つていたが、結局、帰りがけに十兵衛の部屋へ出向いて、しかつめらしく、前と同じ意味のことを繰返して告げた。

十兵衛もまた、友矩に応じて、角張りながら、

「御内意^{かたじけ}、辱^ううござる。だが、多分それがしは欠席申すやもしれぬ。その折には、君前よ

しなにお取り繕つくろいねがいたい」

友矩は、狼狽ろうばいして、

「いやそれは困るな。父上に仰せられず、わざわざてまえに立寄つて、告げておけという將軍家のお心づかいに対しても。……ま、そんな事を云わずに、どうか当日は、打揃つてお越し下さい。兄上が来なければ、弟たちも、参り難いではございませぬか」

初めて自分から碎けて、今度は宥なだめるように云つた。十兵衛は、恩にでも着せるような彼の口吻くちぶりが気に入らなかつたが、友矩が態度を改めると、機嫌を直して、

「いや、行かない事はない。行けたら行く」と、云つた。

春風しゅんぷう烈霜れつそう

一

汐留川しおどめがわの地先に新造船の安宅丸あたかまるが、花嫁のように幔幕まんまくや幟のぼりに飾られて繋つないである。

家光は、春の海を四望にして、宴を張った。

寔に泰平の盛事である。やがて群臣の小舟をつらねて、浜御殿へ休憩に上がり、数寄屋で茶をのむ。茶事が終つてまた、広芝の浜座敷に寛いだ。

旗本の子弟がたくさん陪席に招かれて来ていた。親どもは、こういう機にわが子を將軍の謁に進めておくことは、一生の榮達の緒になると考え、武技の上覧を、側衆まで伺い出た。

「一興だ。見よう」

と、上意である。

家光は、広芝に床几を置かせて、数番の試合を見た。そして果てはやや飽き気味な面持ちだったのが、

「但馬——今日は其方の子息とも見えておる筈じゃが。どれにいる」

扈從の中にいる但馬守に訊ねた。

すると、その父が答えぬまゑに、

「あれに控えておるのが、舎弟の又十郎にござります」

と、小姓組の刑部友矩が、家光の眸を導いた。家光は大勢の若者の中から、鶏群の

一鶴^{いっかく}をすぐ見出したらしく、

「又十郎に起たせい。誰ぞ、腕に覚えの者は、又十郎^{むか}に対え」

と、云った。

又十郎は、上意をうけて、支度して出た。そして選ばれた敵手^{あいて}を四人まで打ち伏せた。

「さすがは柳生どのの三男」

と、動揺^{どよ}めきの中に囁^{ささや}きが流れた。家光も、興につつまれて、初めて満足そうな気色に見えた。そしてなおも、

「誰か、又十郎を破るほどの者はないか」

と、見まわした。

側近にいる刑部友矩は、家光の歡心を買って、自分の面目のように、

「舍弟を破るものは、恐らく今日のお供中にはおりますまい。けれど、長兄^{あに}十兵衛の技^{わざ}に較^{くら}べれば、まだまだ又十郎などは、乳臭^{にゅうしゅうじ}児^こといってよいくらい、段ちがいにござります」

と、云った。

家光は、友矩のことばに、興^{そそ}を唆^{そそ}られて、十兵衛を呼べ、とすぐに云い出した。だが、

陪観者の中には十兵衛の姿が見えなかった。近習たちは、

「たしか見えた筈だが」

と、彼の姿を急に探し廻った。

広芝から少し下がった浜辺で、十兵衛は、上覧試合もよそに、弁当を開けて、独りで酒をのんでいた。

「お召です」

「十兵衛どの、お召でござるぞ」

姿を見て、駈けて来た近習たちが、こう急^せぎ立てると、十兵衛はもうだいたい酔のまわった顔を振向けて、

「何の御用か」

と、腰を上げようとしなかった。

二

「御舎弟又十郎殿と、試合^{しあ}えという上意でござる。すぐお支度あつて、あれへお越しくだ

さい」

近習のことばを聞くと、十兵衛は首を振って、浜辺の草へ、ごろりと横になってしまった。

「どうなされた？ ……將軍家がお待ちでござる。十兵衛どの、すぐという仰せですぞ」

十兵衛は答えずに、眠った振りを装^{よそお}っていたが、執こく揺り起されて、

「御前へ悪しからず、お断りねがいたい。かねて祖父石舟斎からも師父^{しふ}但馬守からも、柳生流は治国の兵法と教えられております。十兵衛が太刀も、遊山^{ゆうさん}のお座興に供するわけには相成りませぬ。又十郎ごときはせいぜいお慰みには手頃な芸を持っておりますゆえ、彼を稽古台に、余人へ勝負を仰せつけねがいたい」

云い終るとまた、横になって、微醉^{びすい}の懶げ^{ものう}な眼を、春風に^{ななふ}翻らせて閉じてしまった。

「……………」

近習たちは、呆然として、佇^{たたず}んでいた。その態^{てい}は、將軍たちの方から見えた。わけて家光は床几に掛けているので、よく見えるらしく、此方^{こなた}へ面^{おもて}を向けていた。

近習はやむなく、駈け戻ってありのまま、十兵衛の返辞を、家光に復命した。

側衆、諸侯、旗本たちの周りの者は色を失った。これは切腹にも当る不敬だと思ったか

らである。家光は、苦杯を嘗めたように唇を歪め、不快な色に漲った底から、今にも何か、峻烈な言葉が吐き出されそうに見えた。

「不屈きなつ。——私が参つて、召連れて参ります！」

昂ぶつた声して、小姓組の中から刑部友矩が起ちかけた。すると、

「刑部待て。かえつて、御無礼に当らうぞ。あのような乱酔者を御前へ曳いては——」

と、あわてて押し止めた者がある。兄弟たちの父、但馬守であつた。

平蜘蛛になつて、但馬守は、家光の床几の横に、手をつかえていた。家光はじろと、

眼をやつて、

「但馬。あの片目は、酔うておるのか」

と、苦々しく云つた。

「はい。ちと酒を飲べ過ぐすと、前後の弁えなく、心にもない大言を吐き、手におえぬ乱酔者にござります。ぶしつけな申し条、きつと、父として後刻、懲らしめまするゆえ、平にお宥し置き下さりますよう」

家光は、許すとも許さぬともいわず、しばらく黙然としていたが、但馬守の老いの白髪を見ると、不愠を感じたのであろう、

「目触りじや。誰ぞ、あの片目を、見えぬ所へ追ひ立てい」

と云つて、床几を向きかえ、

「そうだ、試合を続けい。十兵衛に代つて、又十郎に立ち対^{むか}う者はないか」

但馬守は、ほつとしたように、顔を上げた。同時に、静かに立つて、

「酔いどれの十兵衛に代り、てまえが又十郎の相手いたします。久しく木剣も取りませぬゆえ、試合の程、心^{こころ}許^{もと}ない心地もいたしますなれど、不興の償^{つぐな}いともならば——」

人々は、彼の落着いた身支度と、枯淡^{こたん}な人^{ひと}がらに固睡^{かたず}をのんで見惚れた。また、子^こを庇^{かば}う親心と、君に仕える身の辛さを思いやつて、惻隱^{そくいん}の情に打たれた。

「又十郎、よいか」

と、但馬守は、木剣を把^とつて、広芝の中ほどに出ていた。

三

試合である以上、父子^{おやこ}の間でも、微塵^{みじん}の仮借^{かしゃく}もあろうわけはない。平常の父は恐い。だが、木剣を持てば、又十郎の心境も自ら違^{おのずか}う。

(おれは若い)

遺憾ながら、父の老骨に、一撃を加えることになるだろう。当然、彼はそう自負している。

(もう親父も老いたな。こんど手合せしたら、おまえの方が、三本に二本は取るだろう) 兄の十兵衛が、いつか云った事がある。それからでも、数年間は経っている。その上、父は木剣を取る日は殆どなく、大目付という役に忙殺されて来た。日常、頭のつかい方も、剣人ではなくなつて官僚になつている。痛ましいが、勝負になるまい。

「……………」

又十郎は若い柔軟な四肢^{しし}をすつくと伸ばした。父の木剣も正眼である。相構えになつて父を見る。

木剣は見えて、父の姿は見えない心地がした。霞^{かすみ}という体^{たい}を取ったなど悟る。一呼吸、二呼吸、父の息がひびいてくる。悲しいかな御老体だ。又十郎は打ち込もうとした。とたんに、それを知つたように、父の体が波間の月みたいに揺ら^ゆつ——と上がった。

——来る！

と感じたせつな、ぱんと又十郎の木剣が鳴った。動作は意識でなく霊だった。どう闘つ

たか覚えないのである。だがその瞬間、又十郎は木剣を地へ叩き落されていた。さつと、手を伸ばして拾いかけた時、もう一撃、肩を打たれて、

「参りました！」

思わず云つて、地へ坐つていた。

残念でならなかった。又十郎は肩で喘ぎながら、敗れた木剣を把つて、

「短かった。この木剣が、もう三寸程も長かったら、お父上には負けないものを」

と、未練そうに呟いた。

その負け惜しみの口悔しそうな態が、真実味を漂わせて、見ている家光や周りの者にはおもしろかった。人々の面にかかるい苦笑がながれた。

するとふいに、但馬守が、

「だまれつ」と、辺りの耳を奪うような大喝で叱った。面に、朱をそそいで立腹したのである。

「今の一言は、柳生の家系の者にはない事だ。未練な愚痴。無知な嘆声。聞き苦しむ言である。そのような心根ゆえに、この老人の太刀にすら一堪りもなく打ち据えられるのじゃ。今日という今日、わしも初めて知った。平常人々から、但馬どのの子に甘い、

子に眼がないと嗤わらわれていたことの真実を」

——怒り顫おのいていうのである。はつと又十郎は地へ手をついてしまった。生れて初めて見た父の形相に彼も慄ふるえた。

恐い父としていた平常の父の姿は、実は甘えているからの恐さであつた。今の父の面には微塵もそんな弛ゆるみはない。寸分の情も隙も見せない。

「おのれ如き性根の者が、柳生家の子よ、柳生流のつかい手よと、世に思われては、わが家の流りゅうを誤るのみか、流祖の御恥辱と申さねばならぬ。それもこれも、上様より戴く高禄に安んじ、子に愚かなるこの父の許にいて、修行の精進を心に失うておる証拠でうて何であろう。今日限り、そのような人間は、子でない父でない。勘当申しつけた。——上様のおん前にて、屹度、義絶申し渡したぞ。口惜しくば、その性根のたたき直るまで、修行いたして参れ。——ええ、見るも忌いまわしい奴」

云いながら、但馬守の手にある木剣は、丁ちよう々ちようと、又十郎の五体を何度も打ち続けた。
いた。

「酷ひどい……余りな一徹」

將軍家は眉をひそめて、側にいる友矩ともりのへ止めろと命じた。友矩が出てゆくと、他の人

々もむらがり寄つて、なお怒り歇まない但馬守と、声もなく地に俯つ伏している又十郎の間とを、ようやく分け隔て連れて行つた。

毒

一

四男の右門は、今日の浜御成のお招きを、病氣といつて行かなかつた。兄達のいない留守の間のほうが、前々から、むしろ遙かに楽しかつた。

だが、楽しい半日も、もう暮れかかつていた。きつと、話しに来るだろうと待っていたお由利は、顔も見せないのである。茶を吩咐けると、他の小間使や小僧ばかり顔を出した。「どうしたのか？」

彼はとうとう部屋を出た。それとなく邸の間ごとを覗いたが、彼女はどこに働いているのか分らなかつた。召使に糺せばすぐ知れるものを、そんな勇氣は出せないのである。

——何気なく、父の居間を覗いた。そこへ行くには、錠口があつて、父の留守中は、

用人でも入れないのに、誰か、微かな物音と、人の気配が中でする。

「……あつ？」

灰暗い杉戸の縁から、彼は眼を睜^{みは}ると、部屋の中にいた人影も、ぎよつとしたように振向いた。——白い顔、すずやかで大きな眸^{ひとみ}。由利なのである。

「由利じゃないか。……こんな所に、何をして？」

右門がいううちにお由利の顔は、一瞬の驚きから、常の微笑みに返っていた。

「……お掃除をしておりましたの」

「掃除を」

「はい。殿様から、今朝お立ちがけに、お机のまわりを、きれいにしておくと、吩咐^{いいつ}けられておりましたので……お硯^{すずり}を洗つたり、お机の塵^{ちり}を払つたりして」

「ああそうか。誰も手をつけさせない御書斎だが、そなただけは、格別、お父上も信用していらつしやるものとみえる。……もう済んだのか」

「ええ、もうすぐに片づきまする」

「何じや、白い粉が、畳にも、そちの膝にもこぼれているが」

「殿様のお咳^{せき}の薬^{ぐすり}を、御書^{ごほん}を取りのける弾^{はす}みに、つい滾^{こぼ}してしもうて」

「あ、持薬のおくすりか。……由利、ちと話があるが、ここで聞いてくれるか」

「いけません。朋輩たちが、この頃は、とかくわたしを、嫉^{ねた}みの目で視ております。晩に……」

「晩に……」

「え。そつと、空地の塚の所で」

「あの石のところか。……じゃあ、八刻^{やっ}が鳴ったら行っているぞ」

右門は、約束すると、一刻もそこには悪いように、あわてて錠^{じょうぐち}口の外へ出て行つた。

豊の目のあいだに沈んだ白い粉を注意ぶかく拭き取ってから、お由利は、懐^{ふところ}中へ忍ばせた幾通かの書類を抱いて、その後から、静かに出て来て、錠口の後をピチと閉めた。

二

十兵衛も帰らない。又十郎も戻つて来ない。ただ一人、暗然と但馬守だけが帰邸した。それももう網^{あみ}雪^{ほんぼり}洞に廊下の暗い頃であつた。

浜御成はまおなりの出先で、憂うべき事件のあったことは、留守居の家臣たちはもう知っていた。だが、但馬守の悄しやうぜん然とした姿を仰ぐと、誰も胸がつまって、一語も云えなかったのである。

用人ささおの笹尾喜内老人が、やがて但馬守の室へやへ這入って、しばらく、密ひそやかに話しこんでいた。喜内の嗚咽おえつが洩れた。老人は涙の顔を、懷紙につつんで退がって来た。

「案じ召さるな。どうなろうと、御父子の血は濃い。深い思し召のあることじや」

侍部屋へ来て、喜内老人はいった。そして何を問われても、後は黙りこんでいた。八刻やつの木が鳴った。

邸内の灯りが滅へつてゆく——待ちかねていたように、右門は戸外そとへ忍び出した。兄達が帰らない原因は薄々耳にした。けれど、このままとは思われなかった。またすぐ帰るものと信じていた。土饅頭どまんじゅうのまわりには、若草が萌もえて、もう古い塚みたいになっていた。

「どうしたろう?」

右門は、石のまわりを、繞めぐり歩いた。そしてふと、地下の白骨を思い泛うかべた。綾部大機の死骸が、ぞつと記憶の底から呼び出された。

「ああもうじきに……半歳になる」

三

「はて？」

但馬守は、持薬の咳せきの粉ぐすりを口に含んだが、そのまま、嚙くはみ下さずに、じつと顔を上げたなり、舌先に溶ける薬の味をさぐっていた。

「……どう遊ばしましたか」

側に、手をつかえていた老女が、不審顔して、彼の容子を見上げながら訊ねた。

但馬守は、片手に、水の茶碗を持ったまま、突然立って、

「外を開けい」

と、廊下へ立った。

そして口にふくんでいた薬を、水と共に、がぼつ——と闇へ吐き出した。

「たか女」

と、老女の名を呼んだ。

「はい」

「この薬、いずれから持つて来た」

「いつもの、お手筥てはこの薬囊やくのうから一錠取つて参りました」

「書斎の本箱の上のか」

「左様でござりまする」

「手燭てしよくをつけてくれい」

但馬守は、そこから二間ほど先の一室へ這入つて行つた。——そして一見、何の変りもなく見える部屋の隅々までを見廻していたがふと膝を折つて、指の先で軽く畳を弾はじいてみた。

畳の目から、微かな、白い粉が浮いて出た。彼は、思うところと符節の合つたようにならずいた。

二つ目の本箱を開けた。細かい棚に、絵図や書類が整理されてある。大目付に就役以来の物ばかりが入れてあるので、あるべきはずの書類の何通かが失くなっていた事も、一目ですぐ気がついた。

「喜内を呼べ。——躁さわがずに、静かに」

老女は、でも、色を変えて走らずにいられなかった。喜内はすぐ飛んで来た。

「殿。——何事が起りましたのでございましょうか」

「大した事ではない。はやくそちにいうておけばよかったが、公務のみ一念に、家の些事さじはと、顧みもせず、打捨てておいたのがわしの落度。——由利という新参の小間使、もうおるまいが」

「いえ。おると思いますが」

「いや、おるまい。——じゃが念の為、何か他ほかに異変はないか。邸の内、一応、静しずかに検あめてみる」

四

橋はし 袂もとの堤芽柳どてめやなぎの糸が、ゆるい流れに届くほど垂れている。

柳の上に、月があつた。水の瀬には、月影が落ちていた。春ださが冴さえた晩である。それだけに、物の陰は闇が濃かつた。

恋と死神に憑つかれたように、右門はここまでふらふらと来てしまった。「白魚しらおぼし」と橋杭はしぐいの文字を見た時、はつとした。

「由利、どこで……どこで死ぬのか」

「おやしきの追手が、気がかりでございます。もし捕まったら、あなた様もわたくしも……」

「恥だ。生きているよりも——」

「大川までは、逃げきれませぬ。いつそここで」

「深いだろうか」

ふたりは、水を覗いた。のぞお由利はだまって、帯の間から、ふた包みの薬を出して、右門へその一つを分けた。

「……毒？」

右門の手はふるえた。お由利はにっと笑って、もう包を開いていた。そして、あつと思いううちに、嚙のみくだしていた。

「さ。……右門様、御一緒に」

思慮にただしてみる違いとまもなく、右門もあわてて毒を嚙のんだ。ふたりは抱き合って、橋だもと袂の崖のふちに立った。

「あつ、待て」

「右門ではないかつ」

誰なのか、後ろから早い蹻音なのだった。その声に、かえって、右門は突きのめされたように、ざぶん——と河面かわもの月影を砕いて自分を投げ入れてしまった。

剎那せつな——お由利は、片手を柳の枝につかまって、岸の上に身を残していた。そして飛沫ひまつと一緒に、ばたばたと逃げ走った。

旅たび拵ごしらえの武士が二人、一足おくれに駆けつけて来た。十兵衛と又十郎の兄弟であった。

「右門は、わしが救い上げる。又十郎、お由利を追え、お由利を」

十兵衛は、橋の下流に繋つないであった小舟へ跳んだ。救い上げはしたもの、右門は水を嚙のんでいた。しかし、かえってそれが僂ぎよう倅こであった。舟べりで兄の十兵衛に背を叩かれて、右門は、夥おびただしい水と共に、毒もきれいに吐いてしまった。

天命一つ一つ

「兄上、捕まえて来ました」

岸の上で、又十郎がいう。お由利はその手に捕われていた。

「橋の欄へ縛っておけ」

濡れ鼠の右門を抱えて、十兵衛は小舟から上がって来た。——右門はまだ生きている自分を見出したよりも、水にも濡れていないお由利の姿を見て、世にあるまじき不思議のようになり、あつと、顫おののいてさげんだ。

「舍弟おとと。これ右門……。恥入る事はない。おまえは、四人の中では純情なのだ。同時に、人が好よすぎるから、かねがね危ないと思つたゆえ、この十兵衛がその美しい魔ものをそちの手から奪い、わざと自分の側へ側へと寄せつけておいたのに。……とうとう死の淵へ引きずり込まれたな。危ないところだった。もう一足遅かったら」

と、又十郎を顧みて、

「どうじゃ。わしの意見は、嘘ではなかったらう。お駒はこれの姉なのだ」

「分りました。迷夢がさめてみれば、お駒の日頃にも、思い当るふしばかりでございます」
又十郎も、慚ざん愧きに堪えぬように俯向いて実兄あにの前にひざまずいた。

二

——今日、浜御殿の広場で、父に打擲ちようちやくされた上、勘当とまで、極端な叱りをうけた又十郎は、お駒の家で、自暴自棄じぼうじきな酒をあおっていた。

そこへ、すぐ後から十兵衛が追つて来た。

（馬鹿——）と、実兄あにのしは罵った。（きょうの御打擲は、慈父の太刀だ。あの大愛の木剣がわからないのか）

と、涙をながしていった。

そして、側に酌しやくをしていた湯女ゆな上がりのお駒へ向い、

（おまえは、又十郎を擒人とりこにしたが、同時に、又十郎を情人いろにもしたので殺しかねたのであろう。妹のお由利は、おまえに較べれば、まだずんとしてっかり者だが、柳生の家へ仇しようなどというのは身の程を知らな過ぎる。無用な敵対は思い止とどまって、もなつて亡き家来の回向えんこうでもしてやったがよい）

と、鋭い眼の裡にも、優しみをこめて、懇々と諭さとした。

又十郎は、兄のことばが、初めは解せなかつたが、だんだんと説き明かされて、悪夢のさめたように覺つた。

お駒とお由利は、由緒ある大家の息女だつた。ここ数年間に、取潰された犠牲大名のうちの一家、加藤忠広の家老加藤淡路守の遺子で——先に死んだ綾部大機は、忠義無類なその家来であつた。

姉妹と大機は、主家の没落後、江戸へ流れて来て、大目付柳生家を、ふかく怨みに思つてゐるところから、その報復を、永いあいだ心がけていたものだつた。

そしてお駒は、湯女奉公しているうちに、又十郎から柳生家の内状をそれとなく探り、大機——お由利——と順々に手段をかえて、但馬守の生命から、十兵衛、又十郎、右門、とすべての者の血脈を断つて怨みを雪ぐようと企てたものである。

（わしは、ほぼ察していた。だが、この姉妹や大機のうしろには、もつと無数の天下の敵が潜んでおる。その糸の繋がりを見るまではと知らぬ顔してながめていたのだ。おそらくお父上もはやお悟りと思う。——又十郎、もう湯女修行は切上げて、ここらで父上の大愛に、お酬いせねばなるまいが。いやそちばかりの事ではない。わしも自分の父が石とならぬ間に——）又十郎が心から悔いて、家兄の前に慚愧の手をつかえ、修行を誓つてい

るあいだに、いつの間にか、座から姿を消したお駒は、裏の水屋の板の間で、以前の由緒も偲しのばれる懐剣で、見事に、自害して果てていた。

——兄弟は、そこらすぐ旅支度して、八重洲河岸の邸の外まで立ち廻った。塀の外からよそながら父但馬守に別れをつげたのである。去ろうとすると、喜内が追いかけて来て、たった今、云々しかじかの騒ぎと——右門とお由利の姿が見えない事を告げた。

(しまった。さては)

後を追って、探し歩いた兄達の懸命が届いて、たった一步のところで、右門の生命いのちは拾われたのであった。

三

月は、水に澄んでいた。柳の糸や、流れは風邪に騒いでも、月はいつか澄んでいた。

「右門、はやく帰れ。……身を大事にせい。お父上を守ってくれる者、そちだけを、頼みにして行くぞ」

十兵衛も云った。又十郎も繰返した。

「五年で帰るか、十年で戻るか、行く手も知れぬ世の中の峰をさして、わしらは修行に赴く。父上への孝道は、これ一筋と、思い極めて赴くのだ。頼むぞ、後は」

「はい……。おさらばです」

右門は、別れかけたが、ふと、

「兄上、この女」

と、橋の欄に縛られているお由利を、彼はまだ痛々しげに、眼から捨てきれない容子で訊いた。

「触るな。棘のある花だ。そうしておけ」

十兵衛が云うと、お由利は、きつと眸をつよめて、その顔を見返した。彼女の嚙んだのは、毒ではなかったのかと右門はやつとその時覺った。

「若様、若様たち」

喜内老人であろう、二階笠の紋じるしの提灯を振って、河堤から、橋を越えて去りゆく兄弟へ、涙声をふりしぼった。

四

天草の乱、島原の変は、その翌々年、天下を一時、暗澹あんたんと脅おびかした。兵火は歇やんだが、十兵衛は四年、又十郎も約九年間は帰らなかつたという。右門は、その後、父但馬守の位い牌はいを捧はげて、国元やまとの大和柳生の庄へ引籠ひきこもった。芳徳寺の第一世烈堂れつどう和尚おしょうは彼である。また、春秋十数年の後——但馬守の跡をついで將軍師範であつた十兵衛三厳みつよしは、ある年、郷里の柳生にあつて、野外に放鷹ほうよう中、忽然こつぜんと、急病で死んだ。

慶安三年の三月。寿じゅ、わずか四十四。ある者は、草間がくれの鉄砲で撃たれたといい、ある者は、毒水にあたつて死んだといい、異説まちまちであるが、もしこの頃まで、お由利が生存していたとすれば、またそこに、べつな想像をしてみる余地もある。

江戸柳生三代の人は、いうまでもなく又十郎——飛驒守ひだのかみ宗冬である。決して、若くして資性英武ではなかつたが、晩成一道を究きわめて、長寿長く、渾然こんぜんと大成を遂げた。

青空文庫情報

底本：「柳生月影抄 名作短編集（二）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年9月11日第1刷発行

2007（平成19）年4月20日第12刷発行

初出：「週刊朝日 新春特別号」

1939（昭和14）年

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

柳生月影抄

吉川英治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>